

「2年生のすもう」

牧野満（奈良・下田小）

1. はじめに

すもうの実践をやろうと思ったきっかけは2つあります。1つは、1学期に6年生の市の陸上大会が私の学校であり、綱引きをしていた所、綱が切れるというハプニングがありました。切れた綱を捨てるのはもったいないので、綱を使って土俵を作りすもうをしようと思いました。2つ目は、私の学校がある香芝市に大相撲地方巡業がやってきて、「香芝場所」が市の体育館で開かれました。日本書紀にも登場する「腰折田（こしおれだ）」という場所に記念碑が建てられ、それを記念しての地方巡業だったようです。平日開催だったのですが、家族の人が観に行っただけです。ちょうど九州場所が始まる時でもあり、すもうに関心をもってくれるのではないかと考えたのです。



腰折田記念碑（香芝市良福寺）
遠くに二上山を眺める

2. 実践のねらい

- ・さまざまなすもうのやり方を知り、勝ち負けとはどういうことなのかを積極的に体験させる。
- ・すもうの文化的な内容に触れ、興味を持たせる。

教育現場では「勝ち負けにこだわらず」とよく言われます。しかし、これは勝ち負けとは何なのかを考えさせる体験を閉ざしているという見方もできます。勝ち負けを巡って、それぞれの思いをおもいきり出させ、勝った喜びや負けた悔しさを学んでいくのも大切な学習であると考えます。やるからには、始めから諦めずに「勝ち負けにこだわって」ほしいと思います。また、今の子どもたちは、身体接触の機会が余りにも少ないのも問題だと感じています。体を触れ合って力比べをしたり、相手の息づかいや温もりを感じたり、このような経験が極端に不足しています。力の入れ具合が分からないために、高学年になって、けんかで相手に大ケガをさせてしまうことがあります。手加減ということが分からないのです。力を加えたり、力を受けたりすることを学ぶ教材としてすもうは適しています。ただ、男女関係なくすもうができるのも低学年のうちです。今しかできない大切な学習だと思い、すもうの授業をスタートさせました。

3. 授業計画（全10時間） 対象児童32名（6グループ）

時	学習内容	やったこと
1	土俵づくり	土俵をつくる。（半径2.2m）
2	グループ内での対抗戦	相撲のルールについて説明。 相撲、しり相撲、ケンケン相撲でグループ内の順位（横綱～前頭まで）をつける。 ・3回勝負で2勝した方が勝ち。 ・3つの土俵で2グループずつ（ローテーション）
3		
4		
5	グループ対抗戦	相撲、ケンケン相撲、グループ同士の競い合い（対戦はランク同士）
6		
7		
8	トーナメント戦	まとめの試合を行う。
9		
10	授業のまとめ	授業を振り返る。

（1）土俵づくり

クワ、スコップ、バケツ、トンボなどを用意して、子どもたちと砂場の横に直径4.4mの土俵を作りました。その周りに切れた綱を這わして、動かないようにペグで地面に固定しました。



本ずもう	ケンケンずもう	しりずもう
土ひょうの外にでるか、体の一ぶがついたらまげ。	土ひょうの外に出るか、まげた足がついたらまげ。	土ひょうの外に出るか、体の一ぶがついたらまげ。

（2）グループ内での対抗戦

まずは、グループ内での自分の実力を知るために、3つのすもうを行いました。本ずもう（土俵を使う）、ケンケンずもう、しりずもう（地面に円を描く）という3つの場を作り、6グループあるので、2グループずつ、それぞれの場所での対戦を行いました。

<やり方>

▼3回勝負で2回勝ったらその試合の勝ちとする。勝ち数の多い者から、横綱、大関、関脇、小結、前頭とした。

しりずもうの円は広くてなかなか勝負がつかないので、円を小さくしました。本ずもうでは、まわしがないので、手と手を握り合って押し合う対戦がほとんどでした。予想していたことですが、全く勝てない子どももいました。



(3) グループ対抗戦

グループ内での実力がわかったところで、グループ対抗戦を行いました。

<やり方>

▼同じ力同士（例えば横綱なら横綱同士）ですもうを取る。強さが下の者は、自分の得意とするやり方ですもうをすることができる。3回勝負で2回勝ったらその試合の勝ちとする。

ほとんどが本ずもう選んでおり、ケンケンずもう、しりずもうは少なかったです。グループ内ですもうを行ったときは、手と手を組んだすもうでしたが、体を相手に当ててとる子どもも出てきました。また、引いたり、相手が出てきたところを投げたりする場面も見られました。

☆1回せん（1ばん 対 2はん）

なまえ	勝敗	勝敗	なまえ

勝 敗 で
かち まけ ひきわけ

(4) 「腰折田」の話

グループ対抗戦が始まる前に、日本書紀にも出てくる「腰折田」の話をしました。「出雲（桜井市出雲）の野見宿禰が大和で一番強いとされた當麻蹶速と相撲を取って勝ち、宿禰は蹶速の腰を折ってしまいました。蹶速の倒れた所が腰折田という地名として香芝市に今も残っている」ということを知らせました。腰折田の記念碑の写真を見せたり、すもうにまつわる話をしたりしました。また、保護者から10月に開催された「香芝場所」のパンフレットを貸してもらっていたのでそれも紹介しました。



(5) 九州場所が始まる。すもうを観てくる宿題

九州場所が11月12日（日）から始まるので、テレビですもうを観てくる宿題を出しました。わかったことわからないこと、感想を発表させました。すもうを観るのが初めてだったという子どもも数人いました。わからないことについては、私が答えられる部分は答えて、それ以外のわからない所は、日本相撲協会に手紙を書くことにしました。今までの取り組みと質問を字のきれいな子に書いてもらって投函しました。

(6) 日本相撲協会（相撲博物館）からの返信

返信が届いたのが、12月になってからのことでした。子どもたちの質問に、ていねいに返事されていて、また、写真入りの資料も添えてあり、子どもたちはたいへん感激していました。

<p>① どうしてしおをまくのですか？</p> <p>② まわしのよこについているひもは何ですか？</p> <p>③ まわしの色はきまっているのですか？</p> <p>④ どうしてちょんまげをしているのですか？</p> <p>⑤ どうしてはだかですもうをするのですか？ さむくないのですか？</p> <p>⑥ かったときにもらうのは何ですか？ 何が入っているのですか？</p> <p>⑦ どうして土ひょうは高いのですか？ あぶくないのですか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自分と土俵を清めるため。（照富士が塩をまく写真） ・まわしについているひもは「さがり」と言い、前を隠す意味がある。（石浦のさがりの写真） ・黒・紫色系統となっている。TV放送するようになった頃から、いろんな色が使われるようになり、協会としては黙認している。 ・明治時代になって多くの人はちょんまげをやめたが、力士はちょんまげ以外は似合わないと言うことで続けられた。頭を保護する役目もある。（白鵬の大銀杏とふだんのちょんまげの写真） ・平安時代から続く伝統。純粋に力を比べるための格好だと思う。普段は和服を着て、寒い冬にはコートも着る。（宝富士の冬服の写真） ・懸賞と言って、中にはお金が入っている。幕内の取組には、お金をかけることができ勝者に渡される。（御嶽海の懸賞金を手にした写真） ・土俵の高さは約 60 cm。これは、①見やすくするため、②ケガをしないようにするための2つの意味がある。高くすることで、受け身をとる時間が確保される。
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(7) トーナメント戦 対戦相手はくじびきで決めました。

<やり方>

▼強さが下の者は自分の得意とするすもうを選ぶことができる。3回勝負で2回勝ったらその試合の勝ち。決勝戦では、体の大きい女の子Aと小さい男子Tとの対戦になりました。Tは何度も投げられても、踏ん張って残っていたので、周囲が自然とTを応援するコールが起きました。とてもいい試合でしたが、2対1でTが勝ち、Tへの応援コールに対してAが泣いてしまうことが起こりました。「わからんでもないけどAはつらい思いをしたんよ」という説教じみた話をしました。これが良かったのかどうか？

(8) 授業のまとめ 授業で撮った画像や映像を見ながら、これまでやってきたことを振り返りました。

4. 実践を終えて

子どもたちにとっては、初めてのすもうでしたが、まだまだやりたいという子がほとんどでした。休み時間も土俵に行っすもうを取る姿が見られ、関心の高さがうかがえました。

勝ったり負けたりすることの楽しさを感じてもらおうと思ったのですが、一人だけ一回も勝てなかった子どもがいます。勝てるチャンスが生まれるように、ケンケンずもう、しりずもうなどを用意したのですが、これでも勝てなかったです。もっと、他のやり方があったのかどうか課題として残ります。しかし、その子は「すもうをもっとやりたい」と感想に書いています。子どもは、勝ち負けよりも、それ自体を楽しんでいたのかもしれない。

※奈良ブロック例会 3月10日（土）2：00～／奈良女子大 「1年生障害走」「2年生すもう」の実践報告会があります。「障害走」「すもう」の詳しい報告を行います。